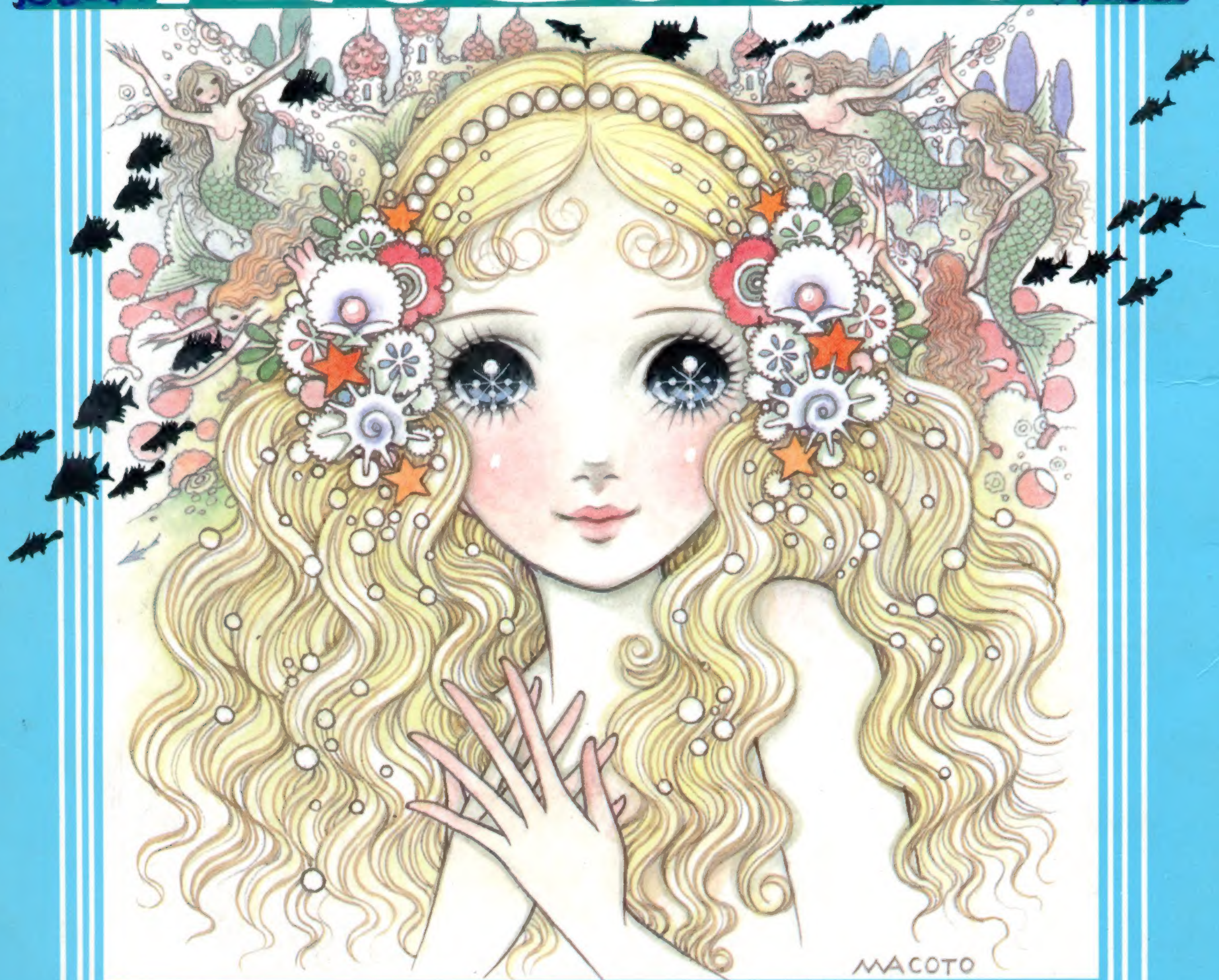
おひめさまえほん 1

にんぎょひめ



高橋　真琴

小学館

『人魚姫』のお話について

『人魚姫』は、アンデルセン童話の中でも、最も広く知られている作品で、一八三七年に出た『子どものためのお話集』の第三集に、『小さい人魚姫』というタイトルで収められています。

『即興詩人』で一躍有名になったアンデルセンでしたが、彼の童話を批判する人が多く、中には、どうして、そんなくだらない子どものものを書くのか、という人までいました。それで、なんとか人にほめられる童話を書いてみたいと考えているうちにできあがったのが、この『人魚姫』でした。

アンデルセンは、この本の序文で「以前の童話のあるものは、どちらかというと子ども向きだった。一方、今度の童話は、深い意味は大人にしか理解できないものかもしれないが、子どもの心もうばうことができると信じる。」と書いています。

彼のいう通り、これはまさしく至純の愛をテーマにした作品で、人魚のひたむきな思いは、子どもにも充分理解できる、美しくロマンチックな物語になっています。

児童文学評論家　西本　鶏介

おひめさま　えほん4

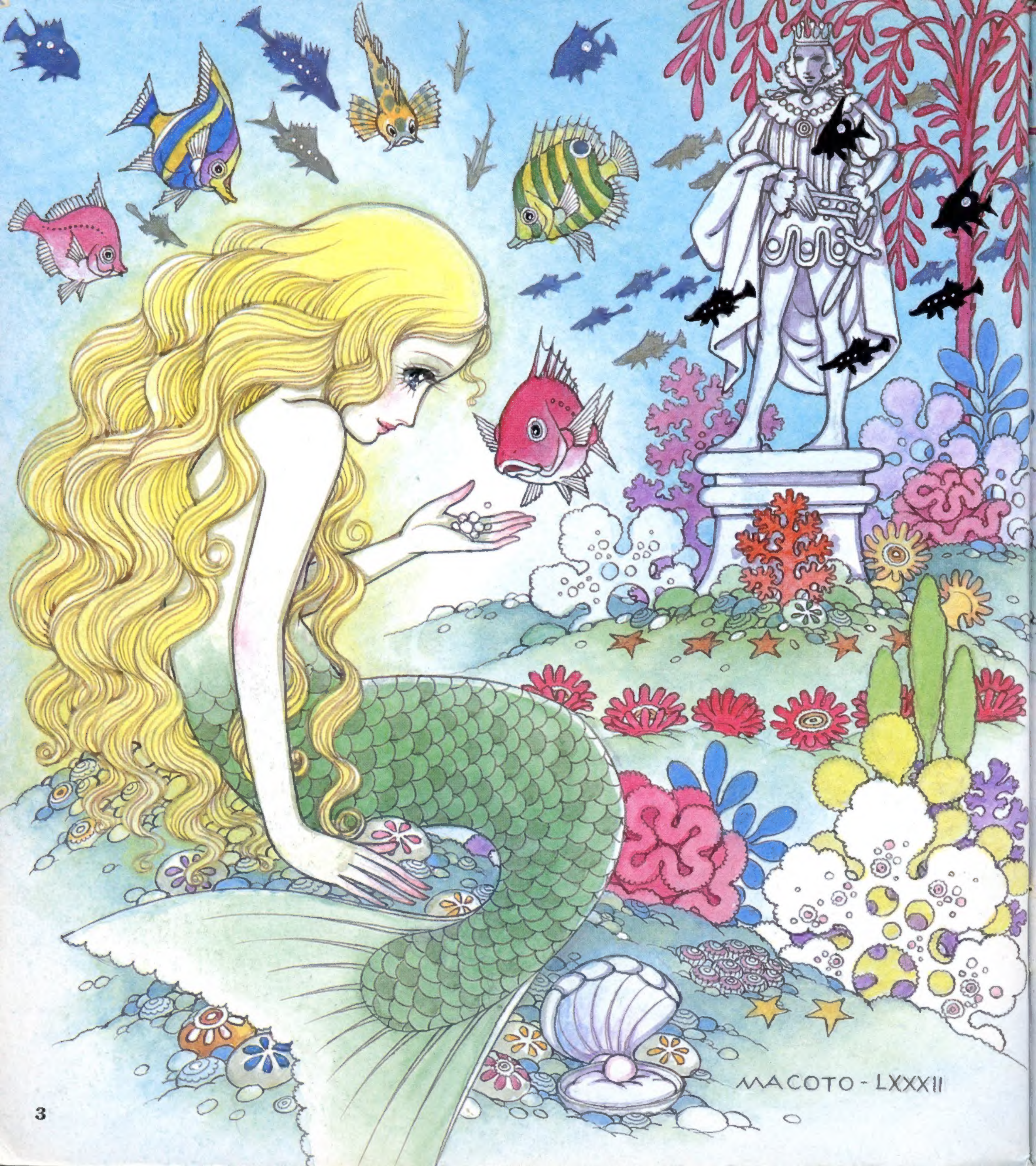
にんぎょひめ



原作／アンデルセン　高橋　真琴　文／間所　ひさこ

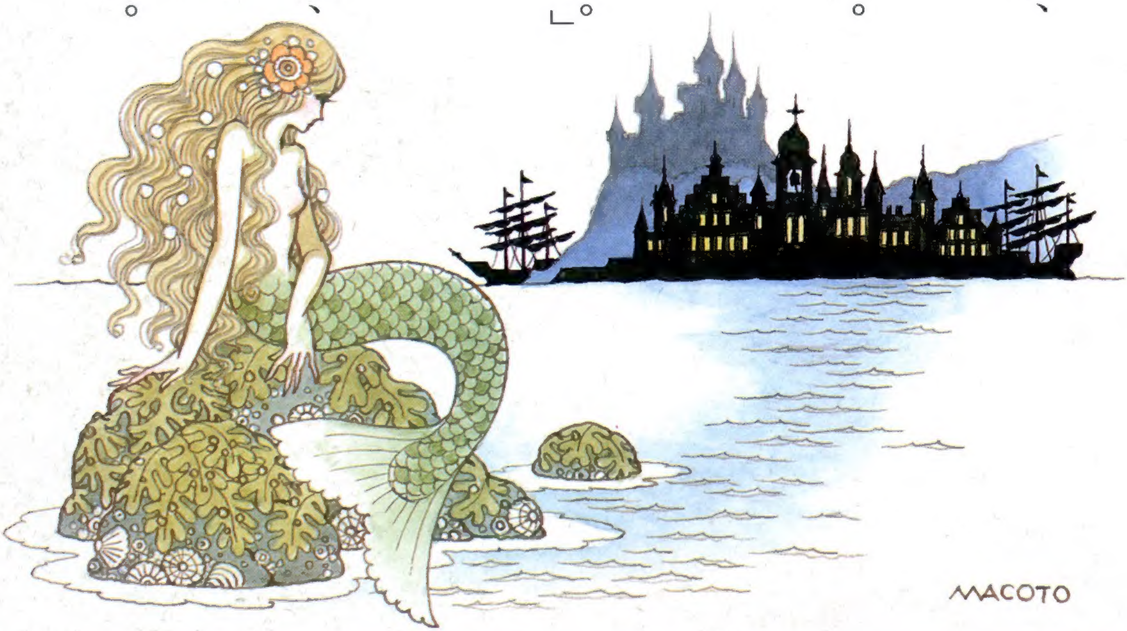
ふかい　ふかい　うみの
そこに、おしろが　ありました。
おしろには、にんぎょの
王(おう)さまと、おひめさまたちと、
年(とし)を　とった　おばあさまが
すんで　いました。
おひめさまたちは　みんなで
六人(ろくにん)　いましたが、いちばん
年下(としした)の　いもうとの
おひめさまが、
だれよりも　きれいでした。




MACOTO - LXXII


MACOTO '82

にんぎょの　おひめさまたちは、
おばあさまから　うみの　上の
せかいの　はなしを　ききました。
「おまえたちが　十五さいに
なったら、うみの　上まで
およいで　いっても　いいのだよ。」
と、おばあさまは　いいました。
やがて、いちばん　年上の
おひめさまが　十五さいに　なり、
月の　ひかりに　てらされた、
みなとの　町を　みて　きました。





つぎの　年には、
二ばんめの　おひめさまが
うみの　上まで　およいで
いって、うつくしい
夕やけを　みて　きました。



その　つぎの　年には、
三ばんめの　おひめさまが
川を　のぼって　いって、
にんげんの　子どもたちや
犬を　みて　きました。

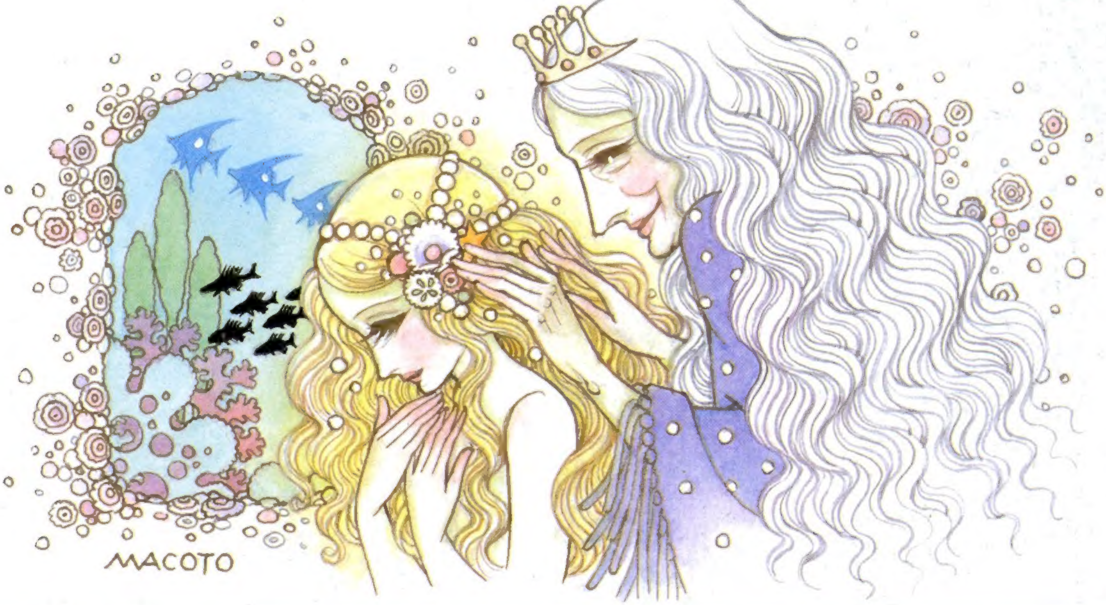


また　その　つぎの
年には、四ばんめの
おひめさまが、なみの　上に
かおを　出して、いるかの
むれや、ふねを　みました。



そして、五ばんめの
おひめさまは、十五さいの
たんじょう日が　まふゆでし
たので、こおりの　山を
みる　ことが　できました。

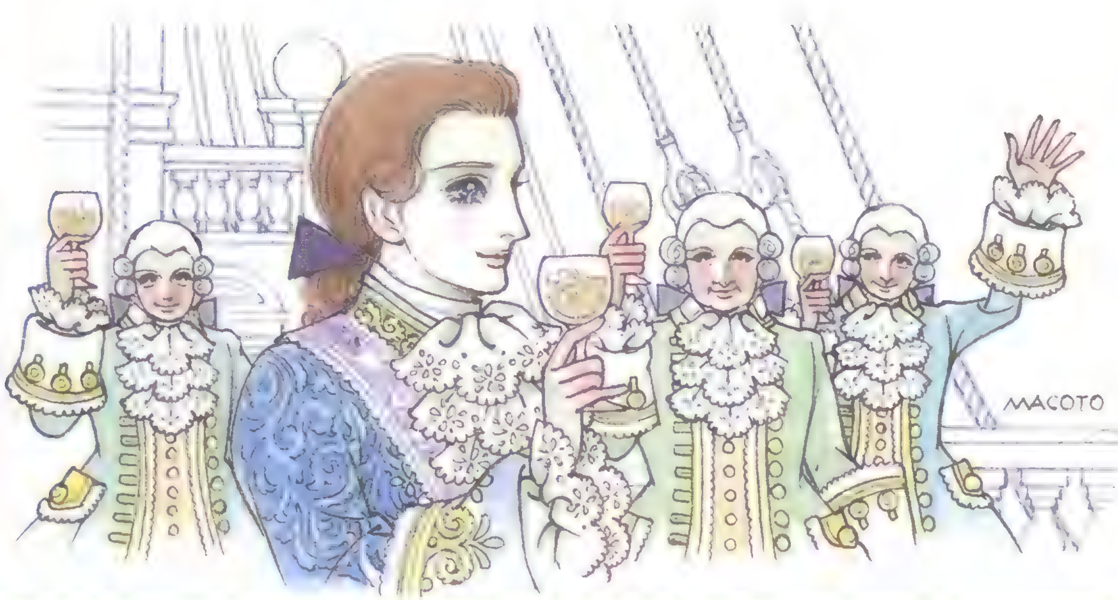
いよいよ、いちばん　年下の
にんぎょひめも、十五さいに
なりました。
　おねえさまたちの　はなしを
きいて、うみの　上の
せかいに　あこがれつづけて
いた、小さな　にんぎょひめは、
どんなに　この　日を　まって
いたでしょう。
「おばあさま、おねえさま、
いって　まいります。」




MACOTO '82


MALOTO '82

小さな　にんぎょひめが
うみの　上に　かおを　出すと、
一そうの　大きな　ふねが
うかんで　いました。
その　日は、ちょうど　わかい
王子の　たんじょういわいの
パーティーが　ひらかれて
いたのです。
「まあ、なんて　すてきな　人。」
にんぎょひめは　ためいきを
ついて、王子を　みつめました。





その　まよなかに、大あらしが　やって　きました。
うみは　大あれに　あれくるいました。
ふねは　はげしい　なみに　もまれて、
あっと　いう　まに　しずんで　いきました。
（にんげんは、水の　中では　いきて
いられないのだわ。
なんとかして、王子さまを　おたすけ
しなければ。）
うみに　なげだされて　ぐったりと　した
王子を　だきかかえると、にんぎょひめは
むちゅうで　およぎつづけました。

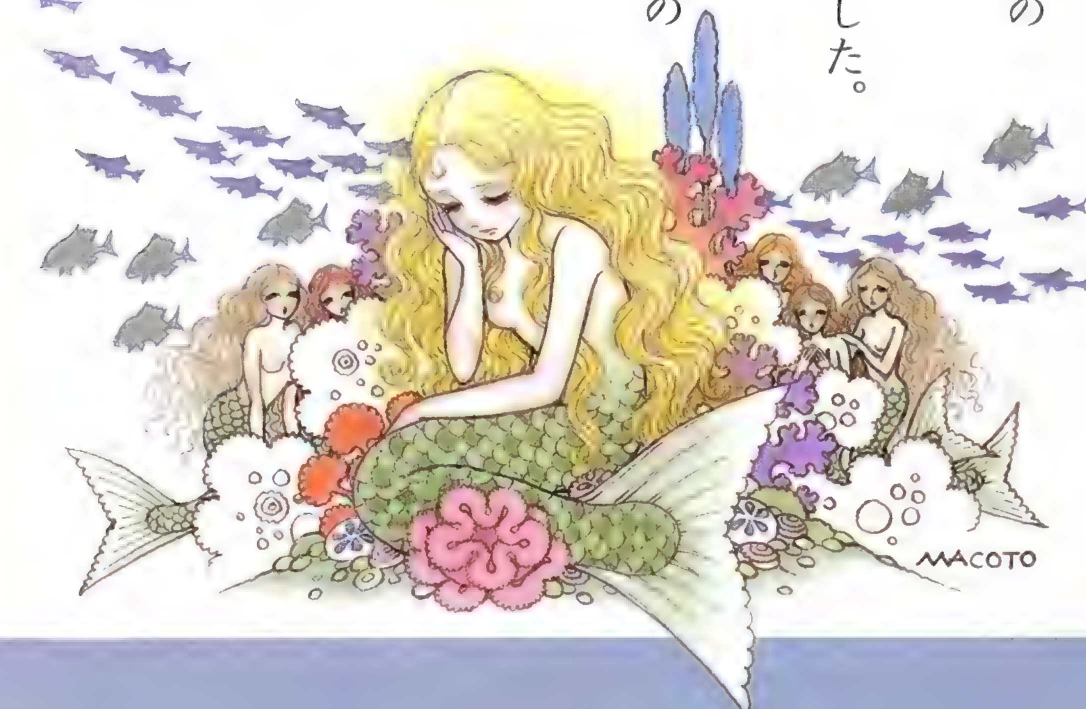

MACOTO '82

あさに　なりました。
にんぎょひめは、王子を　しずかな
すなはまに　つれて　いって、そっと
ねかせて　あげました。
いわかげに　かくれて　みまもって
いると、まも　なく、わかい　むすめが
とおりかかって、王子を　みつけた
ようすです。
（よかったわ、もう　だいじょうぶ。）
にんぎょひめは、ほっと　して、
うみへ　もどって　いきました。



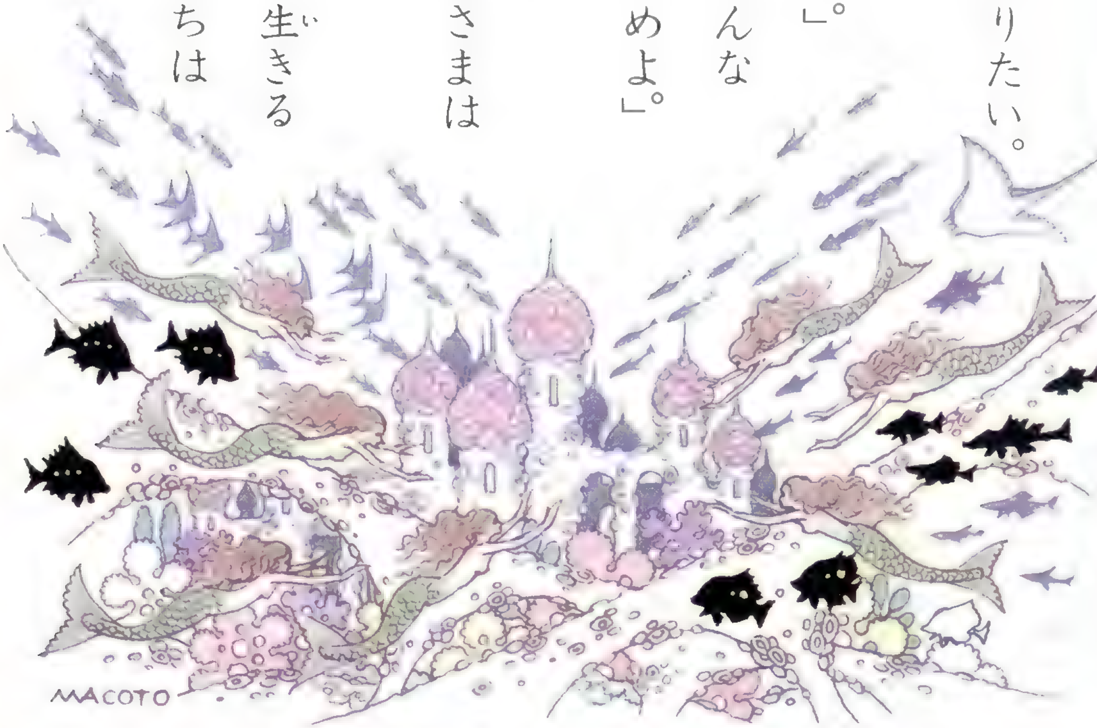

MACOTO '82

小さな　にんぎょひめは、うみの
そこへ　かえっても、王子を
わすれる　ことが　できませんでした。
それからは　たびたび、
うみべに　ある　王子の　おしろの
ちかくまで　いって、なみの
あいだから　大すきな　人の
すがたを　みて　いました。
（ああ、わたしが　にんげんなら、
もっと　おそばに　いられる
のに。）




MACOTO LXXXII

「わたし、にんげんに　なりたい。
うみの　上の　せかいで
王子さまと　くらしたいの。」
「おお、とんでもない。そんな
ことを　かんがえては　だめよ。」
小さな　にんぎょひめの
ねがいを　きいて、おばあさまは
こたえました。
「にんぎょは、三百年も　生きる
けれど、にんげんの　いのちは
ずっと　みじかいのだよ。」



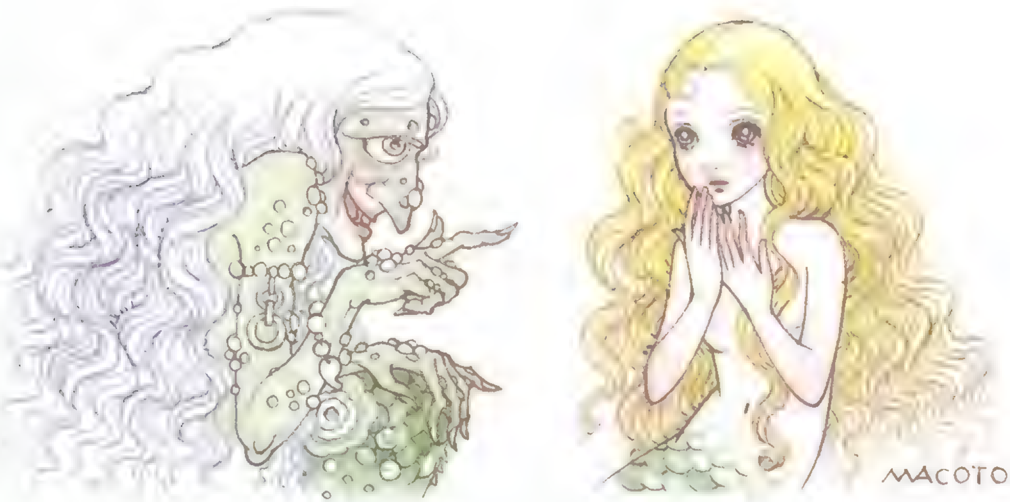

MACOTO '82



おばあさまに　とめられても、
にんぎょひめは、やっぱり
にんげんに　なりたいと
おもいました。

そこで、うみの　うずの　むこうに
すむ、おそろしい　まほうつかいの
ところへ　いきました。

「よし、いいとも。にんげんに
なる　くすりを　つくって　あげよう。
あんたの　しっぽが　とれて、足が
はえて　くるようにね。」



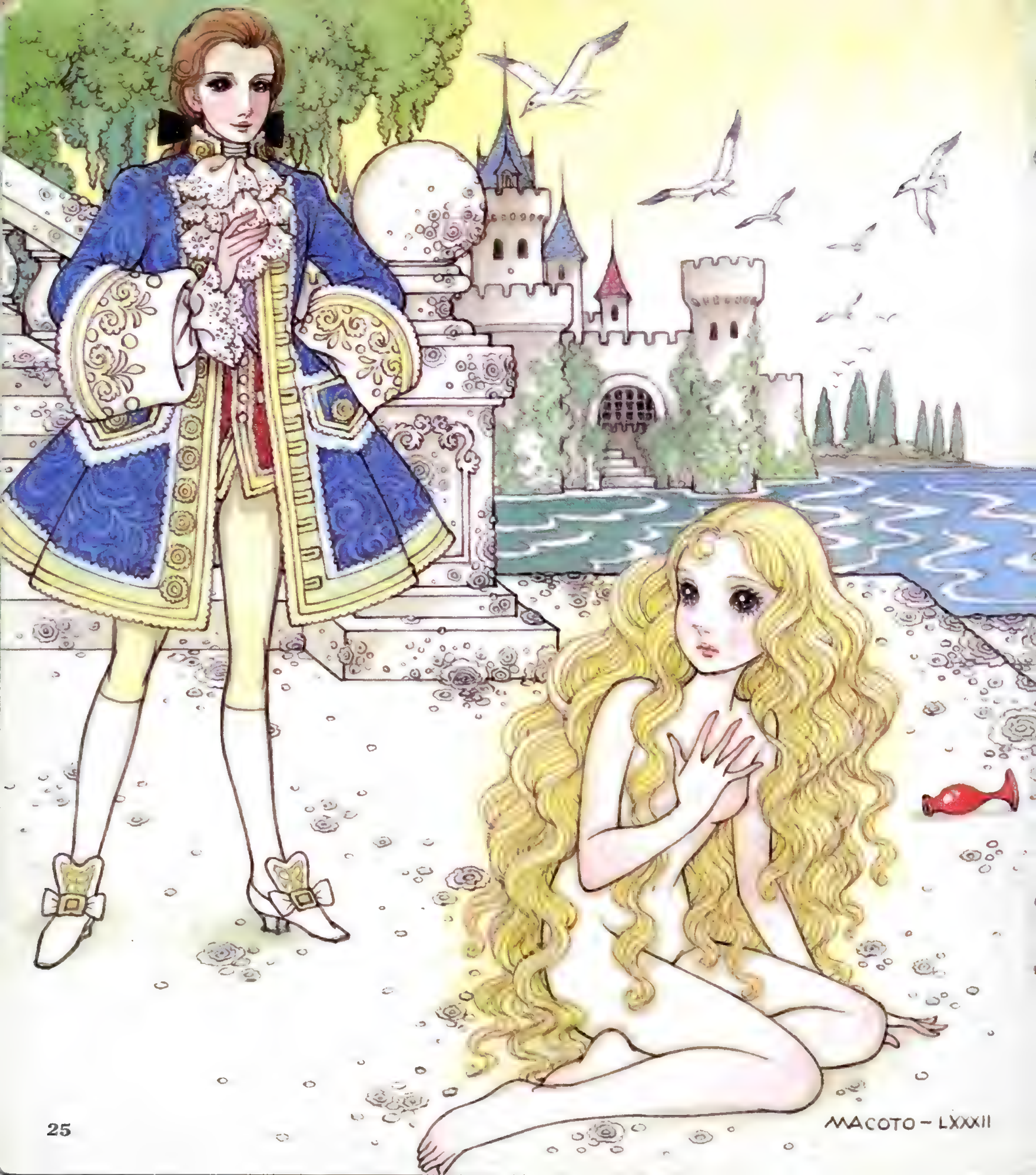


「だが　あんたは、あるく　たびに　するどい
ナイフを　ふむように、足が　いたむだろう。
おまけに　二どと　にんぎょには　もどれないよ。
それに、もし　王子が　ほかの　だれかと
けっこんしたら、つぎの　あさ、あんたは
水の　上の　あわに　なって　しまうのさ。」
「ええ、それでも　かまわないわ。」
「では、くすりを　あげるがね。かわりに
あんたの　きれいな　こえを　もらうよ。」
にんぎょひめは、じぶんの　こえと
まほうの　くすりを　とりかえました。


MACOTO '82

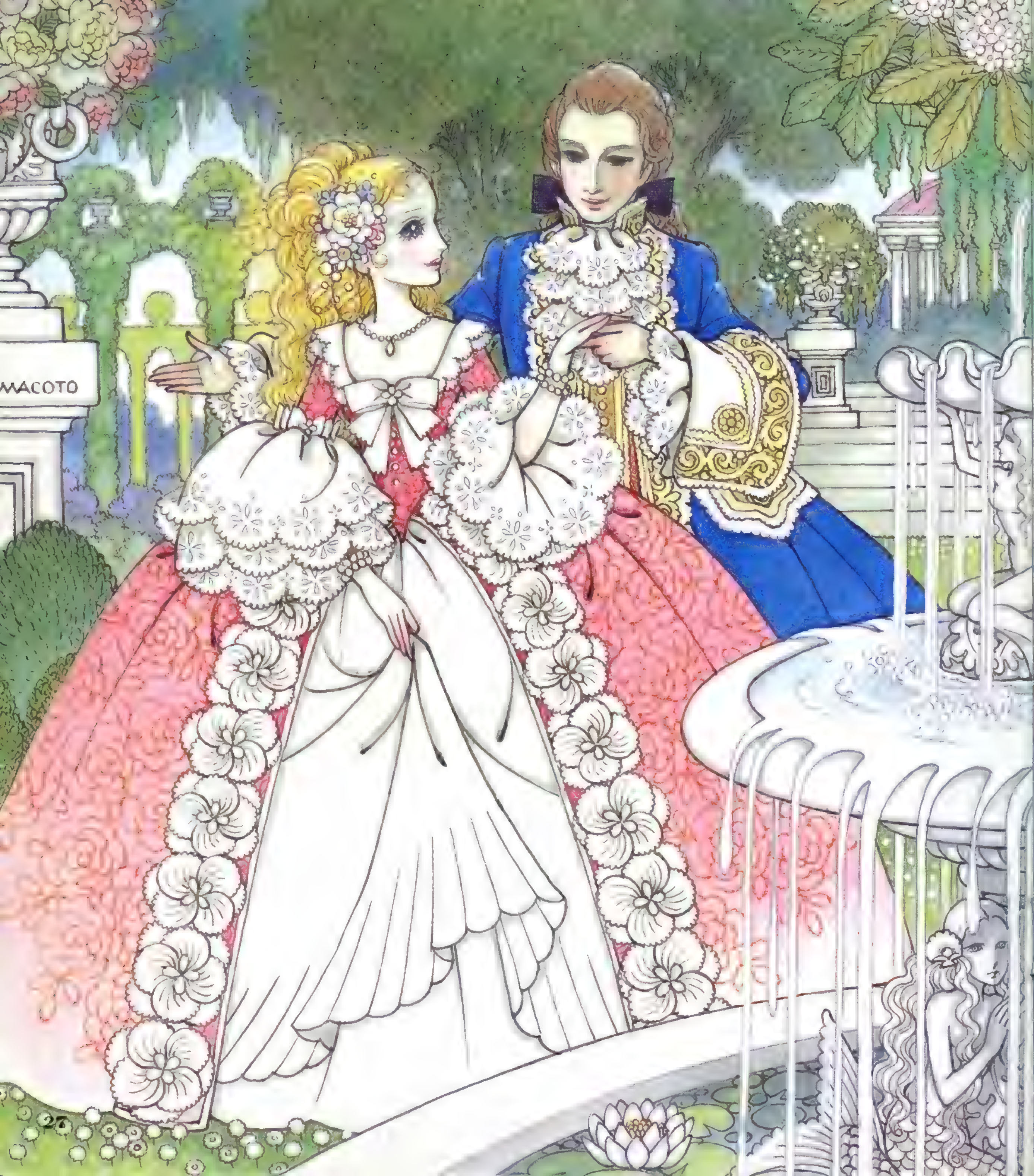
にんぎょひめは、王子の　おしろまで
およいで　いきました。
そして、まほうつかいから　もらった
くすりを　のみました。
きが　つくと、にんぎょひめの
すがたは、にんげんに　かわって
いました。
「きれいな　人だ、どこから　きた。」
王子が　みつけて　ききました。
でも、まほうつかいに　こえを　やって
しまったので、にんぎょひめは　へんじが　できません。

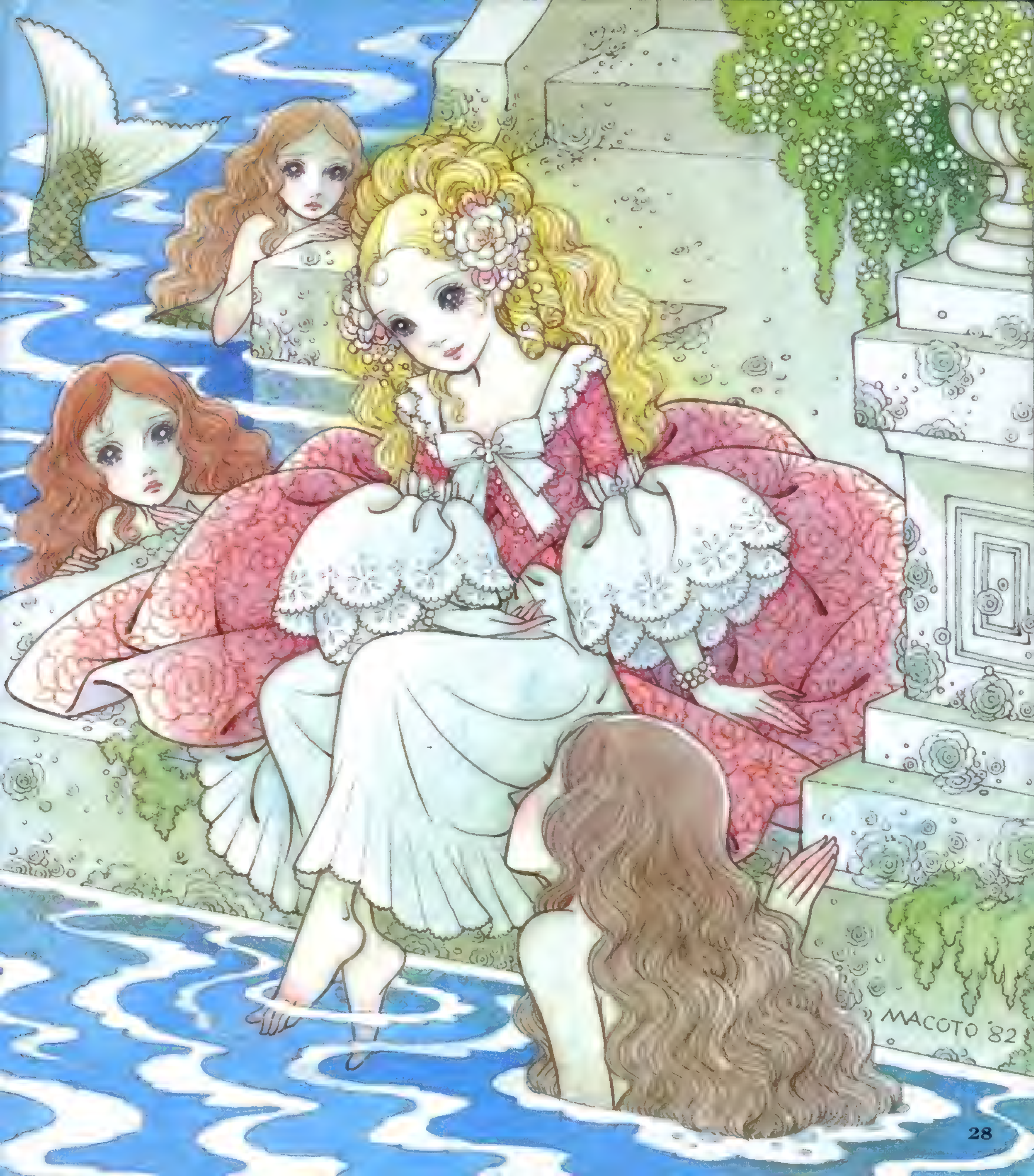



MACOTO - LXXXII

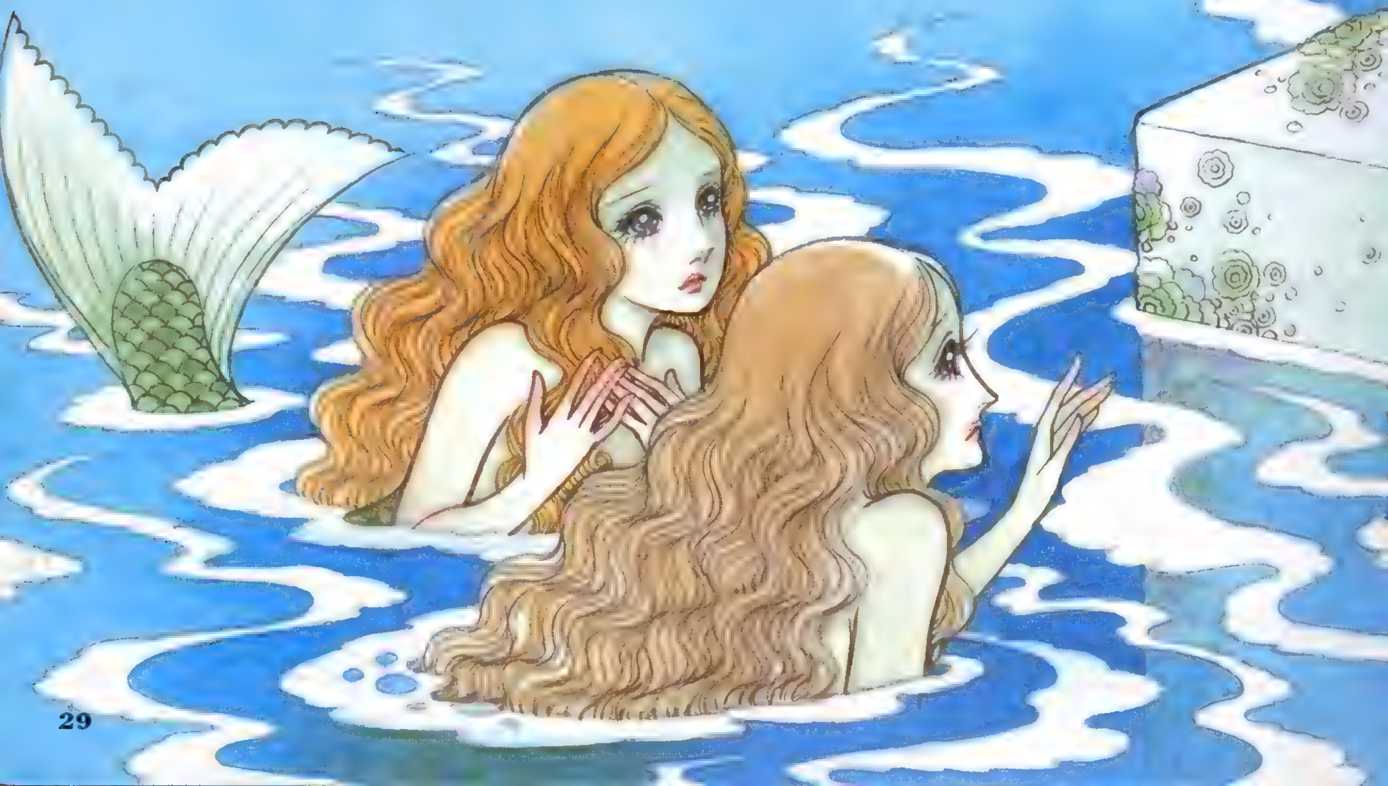
王子は　ひめを　おしろへ　つれて　いって、
うつくしい　いしょうを　きせ、いもうとの
ように　かわいがって　くれました。
「おまえは　あらしの　ばんに
わたしを　たすけて　くれた、わかい
むすめに　よく　にて　いるよ。」
王子は　なんども　いいました。
（いいえ、あなたを　おたすけ
したのは　わたしです、王子さま。
ああ、ひとことでも　口が　きけたら。）
にんぎょひめは、いつも　そう　おもいました。




MACOTO

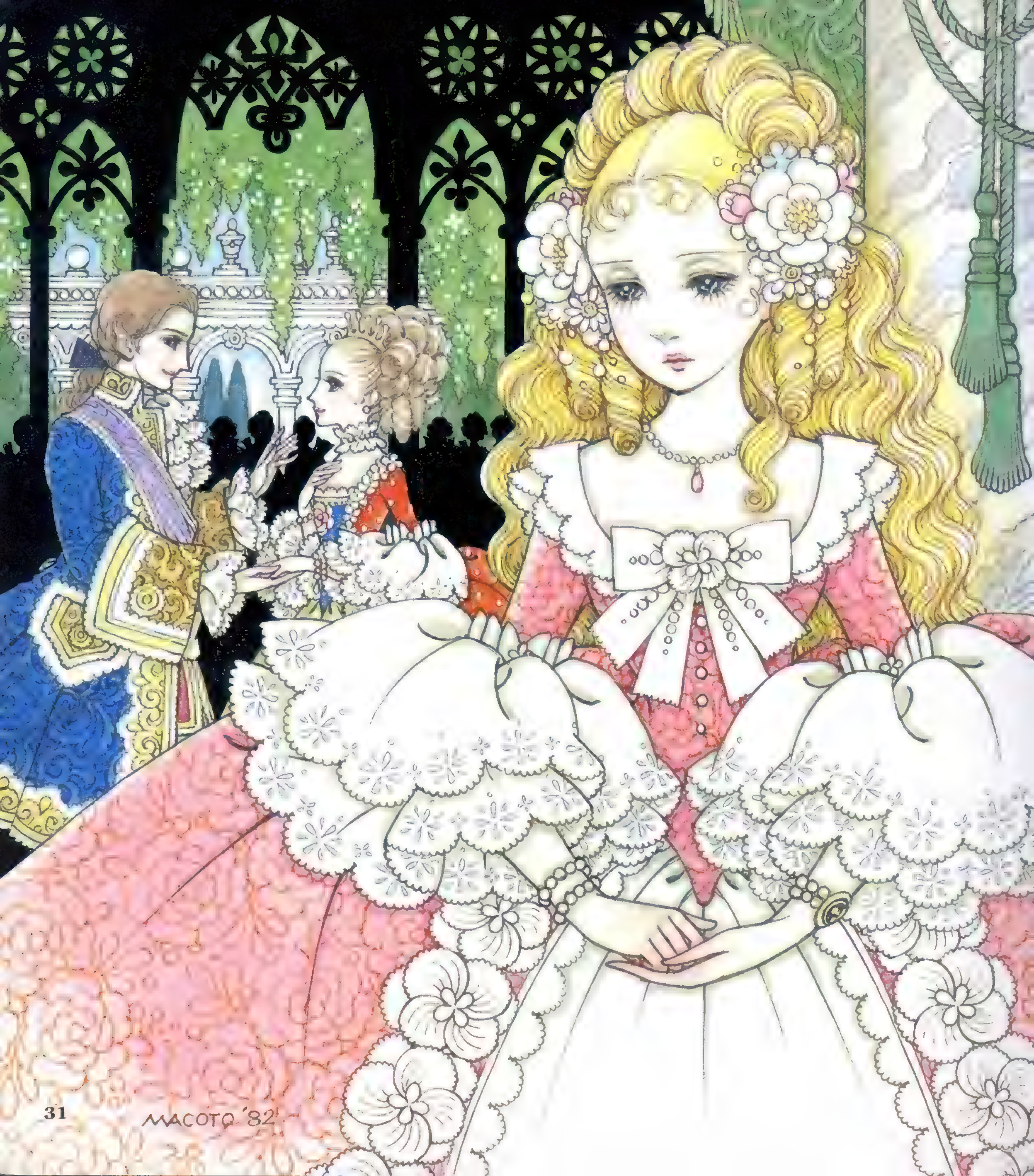

MACOTO '82

ひめの　足は、　あるく
たびに　ナイフを　ふんだ
ように　いたみます。
よる、　おしろの　かいだんの
下で　足を　ひやして　いると、
おねえさまたちが　あいに
きて　いいました。
「かえって　いらっしゃい。
みんな　とても　かなしいのよ。」
けれど、　ひめは　だまって
くびを　ふるばかりでした。

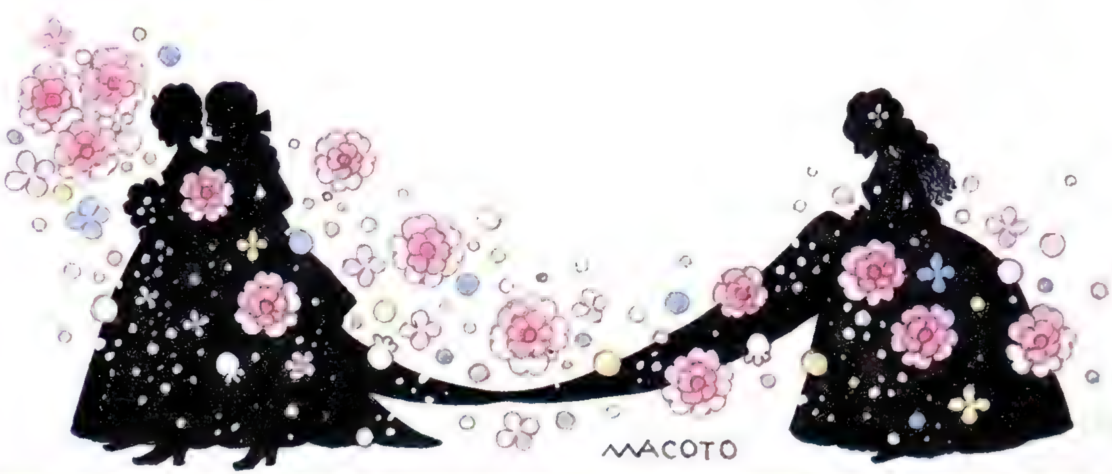


その　うちに、王子が　となりの　くにの
王女と　けっこんする　ことに　なりました。
王子は、王女を　ひとめ　みるなり、
うれしそうに　さけびました。
「おお、あなただ。あらしの　日、
ぼくが　すなはまで　たおれて　いた
ときに、たすけて　くれたのは。」
（ちがいます。ちがいます、王子さま。
ほんとうに　おたすけしたのは　わたしです。）
にんぎょひめは、かなしみで　いっぱいの
こころで　さけんで　いました。



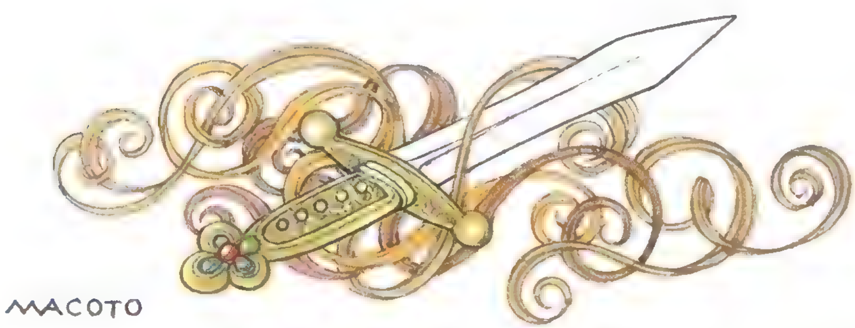

MACOTO '82

はなやかな　けっこんしきが
ふねの　上で　あげられました。
おいわいの　パーティーで、
にんぎょひめは、おどりつづけました。
だれよりも　たのしそうに、
だれよりも　かるがると。
ひめの　足は　ずきずきと　いたみ
ましたが、こころは　それよりも
ふかく　きずついて　いたのです。
（大すきな　人の　ために、こう
して　にんげんに　なったのに……。）



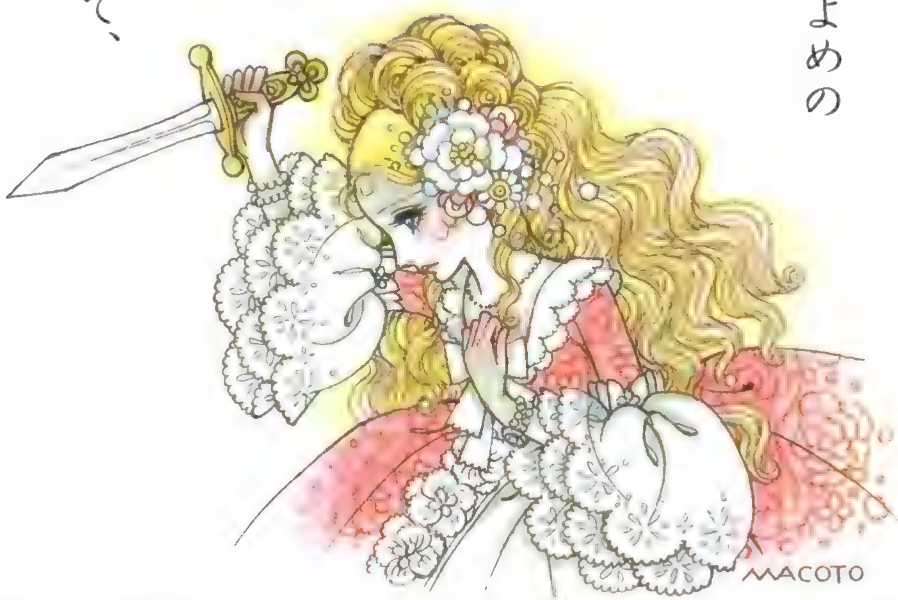

MACOTO '82

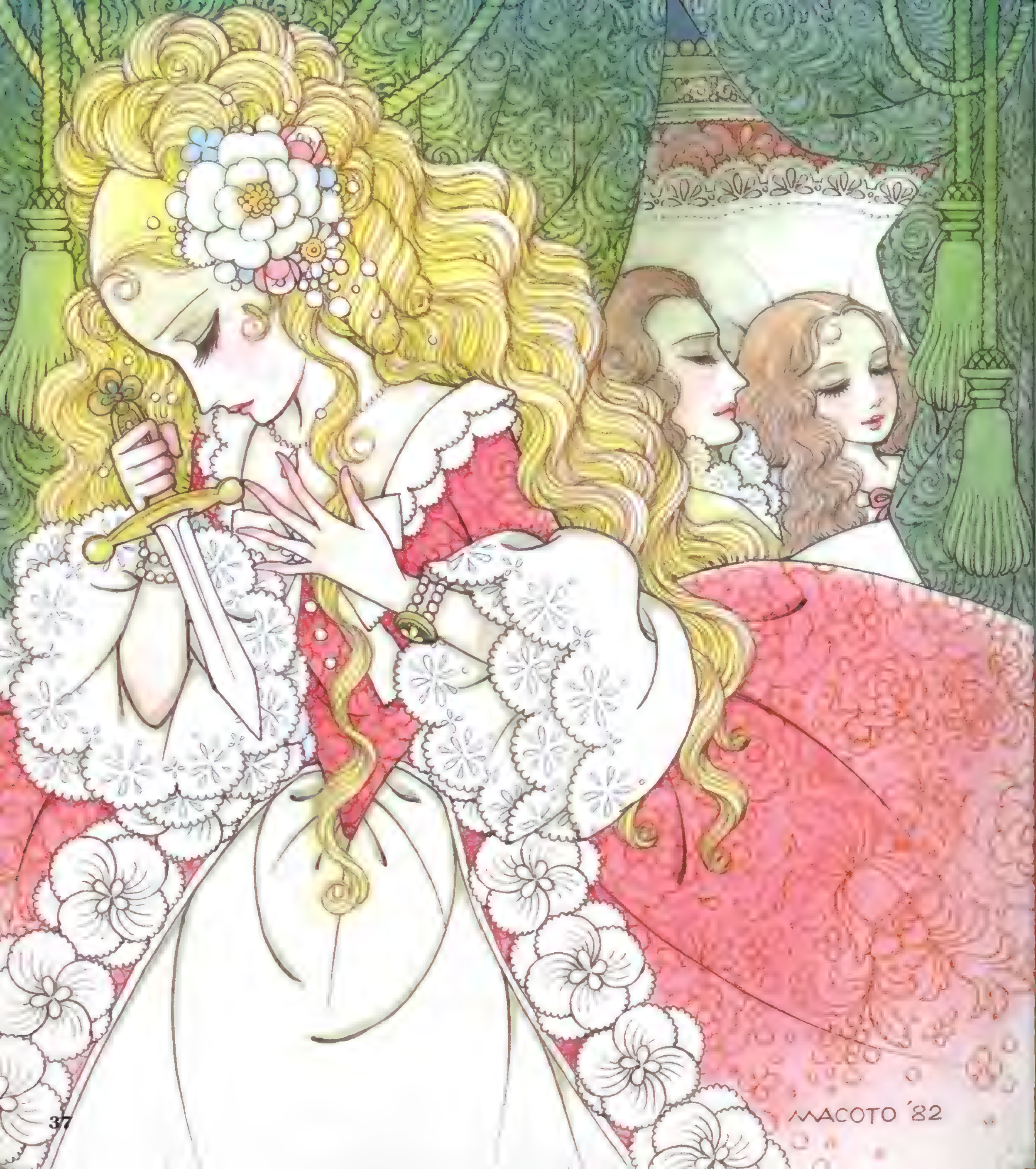
（あさが　きたら、　わたしは　うみの
あわに　なって　しまうのね。）
にんぎょひめは、　ふなべりに　出て、
じっと　よあけを　まちました。
すると、　なみの　あいだから
おねえさまたちが　あらわれました。
「わたしたち、　まほうつかいに　かみの
けを　やって、　ナイフを　もらったの。」
「この　ナイフで、　王子さまを
ころしなさい。　そう　すれば、　あなたは
また　もとの　にんぎょに　もどれるのよ。」

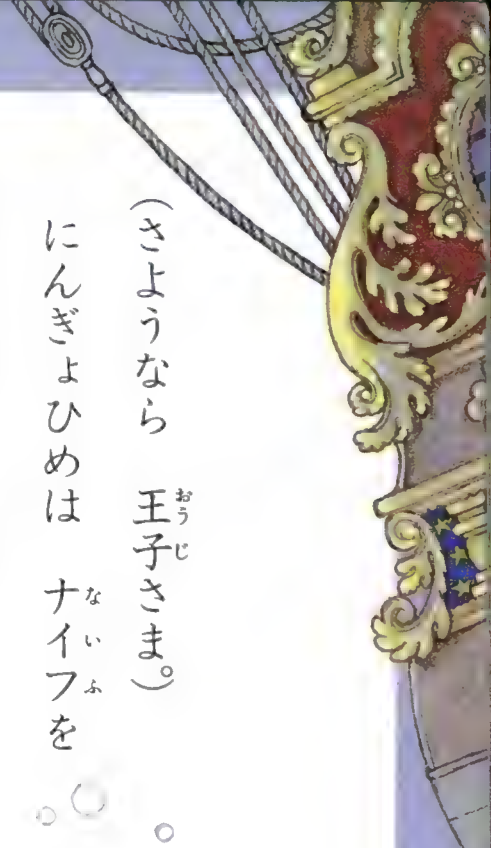



MACOTO '82

にんぎょひめは、花むこと　花よめの
へやに　はいりました。
ふたりは　よりそって、しあわせ
そうに　ねむって　います。
（いま、この　人を　ころせば、
わたしは　うみへ　かえれる。
そして、もっと　もっと　ながく
生きる　ことが　できるのだわ。）
ひめは　ナイフを　ふりかざして、
王子の　ねがおを　みつめました。
（だめだわ。とても　できない。）




MACOTO '82

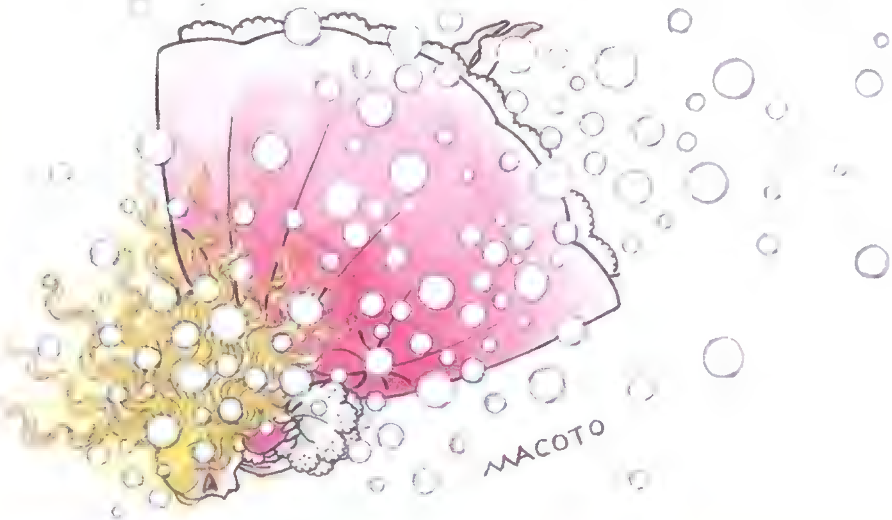


（さようなら　王子さま。）

にんぎょひめは　ナイフを
なげすてると、みを
おどらせて　うみに
とびこみました。

あさひが　のぼり、なみが
きらきらと　かがやきました。

にんぎょひめの　からだは
かるく　うつくしく　すきとおり、
空　たかく　のぼって　いきました。




MACOTO '82



かみさまが
こころの　やさしい
にんぎょひめを、
かぜの　むすめに
かえたのでした。
ばらいろの　くもに
つつまれて、しずかに
ほほえみながら、
にんぎょひめは
いまでも　空を
ただよって　います。

（おわり）

おひめさまえほん４

にんぎょひめ

作・絵／高橋　真琴
原作／アンデルセン
文／間所 ひさこ

定価**300**円

編集兼発行者／相賀徹夫
発　行　所／株式会社 小学館
〒101 東京都千代田区一ツ橋2－3－1
印　刷　所／凸版印刷株式会社

昭和57年８月20日／第１刷発行

おひめさまえほん④

The Little Mermaid

にんぎょひめ



発行・小学館

雑誌コード 61009-04 Printed in Japan 927004 定価300円